



ほかに腰にナイフをさした別カットもあり。大統領というよりも、こりゃロシア連邦保安庁の特殊部隊、ですな。「強いロシア」の体現者として、これほど適任はないのかもしれないが
©ライター/アフロ

エレガンスの社会学

その着こなしに理由アリ

文 中野香織

第8回

大

統領に就任してから7年にもなるうというのに、その装いに対するコメントなど、ほとんど聞かれなかった。赤いタイ、紺スーツで臨んだ6月のG8でも「襟元がフットしないスーツの伝統を大切にしている」だの「シャツのカフスを見せて、もつと腕のいいテイラーに替えるとマシになるかもしれない」だのと、スーツにうるさい目利きにはあっさりと片づけられていた。たしかに、「実はプーチンを着ている」という噂をささやかれても、ひよつとしてプーチン？とつっこみたくなる衝動にかられたものであった。

ところがである。8月下旬、ロシア連邦大統領ウラジミール・プーチン55歳は、一躍、セクシーなファッションアイコンとして脚光を浴びることになった。世界中のメディアが「ファッションニュース」として、プーチンの勇姿を大きく掲載したのである。

モ

ナコのアルベール二世公爵に同行してエニセイ川上流で釣りに興じていたプーチンが、「暑さのあまりTシャツを脱ぎ捨てた」上半身裸のショットである。サングラスをかけ、テングロンハットをかぶって釣りざおを手にするプーチン様の、ジョン・ウエインかステイブ・マ

ックインかというシブい雄々しさは何事か。太くバランスのいい骨格の上に、肩を覆う三角筋、上腕二頭筋、上腕三頭筋が、美しい筋郭を描き出す。厚く広い大胸筋をベンダントが愛撫する。硬くムダのない腹筋は、銃弾もはじき返さなばかり。これみよがしに作り込んだマッチョではなく、自然にこうなりましたという余裕をたたえる、主役オーラを放つボディである。

そうそう、たしかプーチンはKG B時代に本格的な戦闘訓練を受けているし、柔道も五段の腕前だし、サンボ（ロシアの格闘技）でも全ロシア大学選手権のチャンピオンだし、地球上のどの国のSPよりも強いといわれるほどのお方だった…と過去のばらばらなプーチンデータが一気にこの「脱いだらびっくり」ボディに収束する。ある装いを機に、その人自身への関心が一気に高まるような「お転機ファッション」が時にあるものだが、プーチンにとってこの「ベンダント」は「装は明らかにそれである」。

実は脱ぎ捨てる前の白いビタT姿も悩ましかった。ベルトに小枝をさし、黒い革の指開き手袋をつけて遠くの山を指さすプーチンの写真が掲載されたのだが、なぜベルトに小枝!?（同じ疑問を抱いたジャーナリストは少なかつたようで、英「テレグラフ」紙はクレムリンに質問したが満足な回答は得られなかったという）

意味深と無意味の境界でゆれる小枝アクセサリーは、ふと、昨年7月プーチンがクレムリン宮殿の中庭で5歳の男の子のシャツをめくっておなかにキスした事件を思い出させる。「子猫（キトン）みたいにかわいいから、つい…」と説明されたが、

ポスト、ビリー? 「プーチンのようになろう!」

なぜ、おなかにキス? ベルトに小枝といい「キトンキス」といい、謎めいた行動がまたプーチンその人への興味をかきたてる。ロシア議会で大統領を翼賛する動きが進む秘密とも何か闇のほうで通底するものがあるように感じられるが、もつと真相に迫りたいという好奇心にはこの辺でブレーキをかけたほうが身のためだ、と本能が告げる。ミステリアスで危険な男、プーチン。

今

回のプーチンを心ならずも引きたてることになってしまったのが、フランス大統領のニコラ・サルコジ52歳であった。

エニセイ川のプーチン写真とはほぼ時を同じくして、アメリカで休暇中のサルコジが上半身裸のサングラス姿でボートをこぐ写真が掲載されたが、仏「パリマッチ」誌（サルコジと親しい実業家が経営）が掲載した写真は、実は腰まわりの贅肉を修整したものであった、と「レクスプレス」誌が報じた。「ラブハンドル(Love Handle)」（情熱のさなかにはハンドルにもなるので）も堂々と見せればサルコジらしい愛嬌があつてよかつたのではと思うのだが、それをフィットネスコンシヤスの男にはあるまじきものと恥じて削除したそのセコさ自体が、サルコジのボディを恥ずかしくしてしまった。

それにしても、50を過ぎた男の身体は、ライフスタイルやその人自身を正しく映し出す「顔」として男が自分で責任をとらねばならないものなのだ…とくしくも同時期に上半身ヌードを披露した二人の大統領は教えてくれる。スーツはどんな身体にも等しく威厳を与える優れた服であるが、だからこそ、素になつても恥じるところない身体と胆の据わりこそ、日ごろのスーツ評価を

そ

ひっくり返すほどの威力をもつものかもしれない。かといって、「ムダに身体を鍛え筋肉を誇示するのはいただけない」。そう語るのは、いくつものスポーツを通して鍛え上げた身体の持ち主として知られるテイラー、「スタイルクリエーションズ」代表取締役の滝沢滋さんである。「目的のために必要に迫られて出来上がった身体にこそ、美しさを感じる」という滝沢さんにとって、理想の身体とは「子どもこのろに漁港で見た、50過ぎの漁師の身体」だそう。必然性ある本物の身体美は50を過ぎて現れる。たぶん、ついでながら、滝沢さんがスーツ映えるボディに必要な筋肉として筆頭にあげるのが、首から背中上部の僧帽筋。鍛えればアタマとカラダのズジが一本通る。

やや遠い目をして、デスクワークに追われる現実が行き着く先を懸念する若者の一人でもある本欄担当R君は、当面の大胸筋不足を「脱ぐ以前の問題」として気にする読者のために、とりあえず着こなすのでカバーする裏技を考えてくれた。「スーツの胸元に、子猫や子犬を抱いておくんです。胸元が豊かに見えるし、女の子はかわいいって喜ぶはず」。キトンパッドですね。彼女が子猫だけ連れ去って行ってしまいうりすたを覚悟のうえで、お試しを。

Kaori Nakano
服飾史家。人へ会って、話を聞き、そして書くのがライフワーク。UOMOが提唱するエレガンスを、毎回人物を切り口にしてわかりやすくひもときます。著書に「モードの方程式」『着るものがない!』(ともに新編社)などがある。